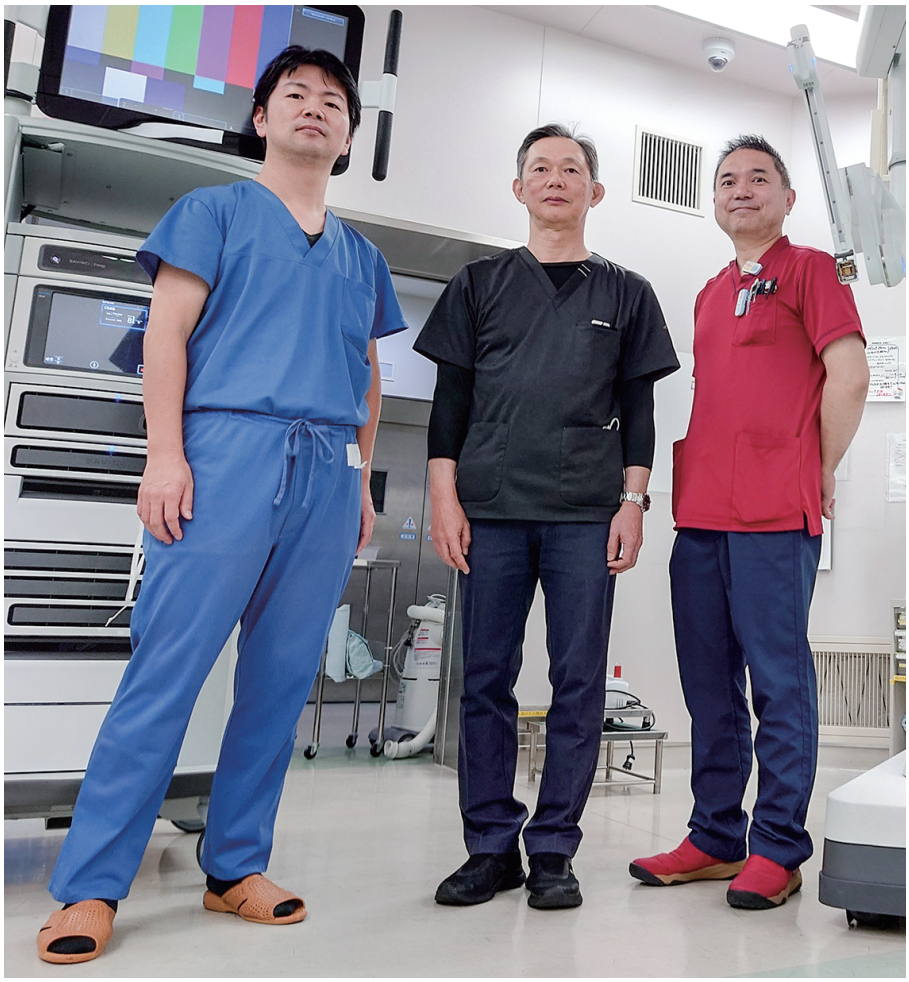

ダヴィンチがやってきた

左より
泌尿器科
岩田 隆寿 医長
錦戸 雅春 部長
大仁田 亨 医長

このたび、長崎医療センターでも、手術支援ロボット「ダヴィンチXi」が導入されることになり、2023年11月10日、ついに念願のダヴィンチXi実機が搬入されました。

あらゆる領域において、手術は医師の技術、医療機器の進歩により、低侵襲でより質の高いものへと年々進化を遂げています。進化した医療機器の代表的なものの一つとして“手術支援ロボット”があります。

従来から低侵襲手術として行われている鏡視下手術（腹腔鏡手術、胸腔鏡手術）に、ロボットの機能を組み合わせることで、鏡視下手術では困難であった角度からのアプローチ、手ぶれのない緻密な操作ができ、また精細な3Dモニターでこれまではよく見えなかった微細な構造を視認しながら手術ができるなど、より高度な手技が可能になります。術者はサージョンコンソールと呼ばれる機械に座り、遠隔操作によって手術が行われますので、これまでのように医師が無理な体勢を強いられたままで手術を行ったり、長時間立ったまま手術を行うことがなくなり、患者さんへの侵襲軽減のみならず、術者の身体的負担も軽減できることも特徴の一つです。昨今泌尿器科、胸部外科、腹部外科、産婦人科などの領域において急速にこのロボット支援手術が普及しています。

前立腺がんにダヴィンチで挑む

優秀な機器とはいえ、ロボットがすべて手術を行ってくれるというわけではなく、操作するのは我々人間です。術者はこれまで鏡視下手術、開腹手術等で培ってきた知識、技術を生かしながらこのロボットを自由自在に操ることにより、さらに質の高い手術ができるよう日々トレーニングを積んでいます。精密な機器であるためセッティング、メンテナンスには臨床工学技士が、患者のケア、周辺機材や手術室全体の環境調整には看護師が、手術中の全身管理には麻酔科医が関わり、これらすべてがうまく機能することにより質の高い手術が成立します。

術者、麻酔科医、看護師、臨床工学技士でチームを結成し、12月からの本格稼働にむけ、様々な場面を想定したシミュレーションを行っています。泌尿器科における前立腺がんに対する前立腺全摘除術を皮切りに、その後徐々に適応疾患、領域を広げていく予定です。